

「エコノミー」の逆襲

(財)九州経済調査協会 理事長 今 村 昭 夫 *

高まる食の安全性への関心

近年、食をめぐる安全・安心を脅かすニュースが多い。雪印乳業集団食中毒、BSE（牛海綿状脳症）と関連した偽装肉、続いてSARS、ホルマリン漬けフグ、合成抗菌剤入り中国鰻加工品、偽黒豚、賞味期限を偽った鶏卵、鳥インフルエンザ等々、挙げればきりがない。農薬漬け野菜や抗生物質入りの飼料を与えた養殖の魚や海老、酸漬け種苗を使った養殖海苔なども含めて、我々は間違いなく安全・安心な食品を果たして食べていると言えるのであろうか。

他方、安全でおいしい水の確保も問題として浮かび上がっている。世界的な水不足の進展が指摘される中で、消費者はいま水の質についても神経質になっている。水道水に含まれる微量元素、アルミがアルツハイマー病と関連しているという指摘も出されている（黒田洋一郎『アルツハイマー病』pp.92～93）。こうしたことから天の恵みとも言うべき水を商品とする水ビジネスが脚光を浴びている。ミネラル・ウォーター、とりわけフリーラジカル（活性酸素）を消す活性水素を多く含むという日田天領水の人気が高く、海洋深層水も商品化されている。

水も含め、食に対して不安を感じている消費者が多い。『2004年度九州経済白書』によ

る九州の消費者アンケート結果では、「食の安全性に关心がある」59.4%、「関心が少しある」34.8%，合計すると、実に94.2%に達している。何故これほど食品の安全性が問われるようになったのか。

減らない農薬・化学肥料

人間が農薬や化学肥料を開発して大量に投入するようになって、その生物、自然にとつての有害性が明らかになった。レイチェル・カールソンは、効果の強いもの、分解されないものを開発すればするほど、生物、自然を痛める度合いが大きいことを解説した。彼女は残留農薬の食物連鎖から有害な物質の蓄積がやがて生殖細胞を突き破って、遺伝をつかさどる部分を破壊し、変化させるとまで指摘している（新潮文庫『沈黙の春』p.18）。

それから37年後の1999年現在、アメリカでの農薬使用量は4割増しになっているが、害虫被害13%，病害などを合わせた全被害は20%増しと、悪循環にはまりこむ前より増えているという（ポール・ホーケン、エイモリ・B・ロビンス、L・ハンター・ロビンス著、佐和隆光監訳『自然資本の経済』p.309）。

BSE と GMO

それどころか、我々は知らないうちにBSE

* (財)九州環境管理協会 評議員

の肉を食べさせられ、またGMO（遺伝子組換え）の大豆や小麦などを使った食品を食べさせられている。肉骨粉を食べさせた牛がなぜBSEになるのかということについては十分解説されていると言えないが、共食いによる種の破滅を避けるための天の摂理という考え方（原三信会病院：平裕二院長）は納得できる。

また、遺伝子組換え食品の利用についても、長い時間をかけた慎重な検討が必要なことは言うまでもない。最近、北海道が屋外での遺伝子組換え作物の試験的栽培禁止を打ち出した。種子や花粉の飛散による混入を考えれば、当然の措置と考えられる。一方、中国政府は米国からの遺伝子組換えの大豆や小麦などの輸入受入れを決定したと報じられている。背景に中国の食料供給不足があるのは事実であるが、将来、大きな問題を生じる可能性がある。

石油依存型食料供給の危うさ

他方、食の問題で本当に心配されるのは食料の入手難・高騰、飢えだと言われている。それは現代農業が石油に依存しているからである。過去150年の地球上の人口爆発は機械化と石油化学肥料や農薬による農業生産力の飛躍、米国による小麦や米の新種の開発とその発展途上国への普及、いわゆる緑の革命がもたらした。アメリカの総エネルギー消費の4%が食料生産に、さらに10~13%がそれらの食料の輸送、加工、包装、国内スーパー・マーケットへの配達に使われる。つまり14~17%が食料を食卓に並べるのに使われており、将来的に化石燃料の枯渇から個人の機動性と食の間で難しい選択を迫られることになるかもしれないという（ジェレミー・リフキン『水素エコノミー』p.210）。そうしたことから無尽

蔵に得られる水素エネルギーに注目し、水素エコノミー社会の到来が構想されている。

エコロジー優先への転換

今一つ別の解決方向としてエコロジー論がある。

ドイツでは年間30億個も消費される人気の高いストロベリー・ヨーグルト1カップを製造するために要する輸送距離が平均5,650マイル、原材料の仕入業者と加工業者との間の運搬距離も含めると、輸送距離はさらに7,250マイル、実にドイツとニュージーランドまでの距離になるという試算が出されている（ポール・ホーケン、エイモリ・B・ロビンス、L・ハンター・ロビンス前掲書p.309）。牛乳・いちご・砂糖・その他ごく普通の材料があれば、どこの台所でも作れるのに、これほどの分業生産が必要なのか。空間的な分業生産の見直しが求められている所以である。いま日本で叫ばれている地域の産物を地域で消費しようという「地産地消」も、このような文脈に置いてみると、その意味の深さが理解できよう。

こうした現状に対して、フランツ・アルトは、エコロジーがエコノミーの下に置かれていることが間違っているとして、エコノミー優先からエコロジー優先への転換を提唱している。彼はエコロジーを効率的な長期的エコノミーと捉えている（フランツ・アルト著、村上敦訳『エコロジーだけが経済を救う』p.204）。

エコノミーの逆襲

レイチェル・カールソンは言う。いまは専門分化の時代で、全体がどうなるか気が付かない。いやわざと考えようとしない人もいる。また、いまは産業の時代だ。とにかく金をも

うけることが、神聖な不文律となっているところ（レイチェル・カールソン前掲書p.24）。

マックス・ウェーバー流に言えば、プロテスタンティズムの宗教意識から由來した天職（Beruf）義務、あるいは世俗内禁欲のエートスがマモンの営み（拝金主義）に結び付いているということだ。雪印乳業の崩壊や鳥インフルエンザによる大量死が出ている中での駆け込み出荷は、こうした拝金主義の極端なケースである。

食の安全性問題の根源は、まさにこのようなエコノミー優先社会にゆきつく。生態系を軽視した「産業の時代」に対する自然の逆襲である。

ここで我々はエコロジーとエコノミーが同じ語源（ギリシャ語の ekos=家）から出していることを思い出す必要がある。エコロジーが居住空間、生活空間、生活環境であり、エコノミーは家を維持、手入れするための行為、居住するための行為、生活するための行為というものが本来の意味である（フランツ・アルト前掲書における村上敦氏の訳者あとがき）。

そこからエコノミーは経済、節約へと派生してゆく。しかしながら、エコノミーにはもう一つ別の意味があるという。天の摂理という意味である（九州大学：福留久大教授）。このことは『小学館ランダムハウス英和辞典』に economy の訳として「（組織の各機能の）有機的統一；（自然界などの）理法、体系；（有機的な）組織 {体}」が明記されており、具体的事例として the economy of nature 自然界の理法（秩序）が紹介されていることからも確認できる。とすれば、我々はエコノミー（経済）優先の結果として、エコノミー（天の摂理）から逆襲されているとも言えよう。レイチェル・カールソンは、40年以上も前に、

女性特有の感性と実証的な調査によって、それを感じ取っていたのではなかろうか。

経済学の見直し

それと共に指摘しておきたいことは、経済学が自然を忘れ、原理的に自然を破壊してきたことである。ハンス・イムラーによると、科学的経済学の成立から今日に至るまで、自然是単なる生産条件の意味しか持たず、それは最初から客体的なものである。工業的生産様式は自然を自らに従属させようとし、自然の障壁を乗り越えようとする。工業的生産様式は自然の生産諸力を支配しようと試みる（ハンス・イムラー著、栗山純訳『経済学は自然をどうとらえてきたか』pp.4～5）。経済学には、古典経済学、マルクス経済学、新古典経済学に至るまで、自然との調和、レイチェル・カールソンが指摘したような天敵の思想はない。まさに生態系と関連付けた経済学の見直しが必要なのである。

食生活・食文化の見直し

最後に、医学者の新谷弘実氏の言葉を以下に紹介して、この隨想を閉じることにしたい。「現在、私たちはからだの処理能力を越えるような大量のフリーラジカルを発生させる環境で生活しています。例えば、紫外線、放射線（レントゲン線）、超音波、電磁波、排気ガス、排煙、農薬、除草剤等、また種々の薬品、もちろんタバコ（副流煙を含む）、アルコール等から植物油・脂肪の取り過ぎもフリーラジカルの大量発生の原因をつくります。病気を予防したり、長寿を保つためには、知らない間に体内に発生しているこのフリーラジカルの害を取り除く栄養摂取、すなわち有機栽培・無農薬の精製されない穀類・野菜・果

物・海草類をよく食べ、良い水を1日2～3リットル飲み、適度な運動とストレス解消のための精神的訓練等が必要となります。」(新谷弘実『胃腸は語る』p.172)

そしてまた氏は語っている。

「ビニールハウス栽培や日光に当たらないようにして作った野菜類は抗酸化物製造の点からでも我々の健康保持のために反省すべき余地があると思われます。すべての食となる植物は生きた土壌すなわち農薬・除草剤・化学

肥料を使用せず、有機肥料を入れ、ミミズを住まわせ、良い水を入れた土地で太陽によく当たらせて作るべきものです。」(同上p.173)

以上、述べてきたように、個人レベルの食生活・食文化の見直しをグローバル社会全体のものとしてゆくことは、エコノミー優先社会からの転換、自然を忘れた経済学の根本的見直しとともに必要となっている。こうした延長線上に安全・安心の食は確保されなければならない。